

1 わが魂に濁りあり(『処世論』)

①わたしは青年時代からローマ皇帝マルクス・アウレリウスの『自省録』を愛読してきた。50年の中になる(『追想 世界ビジネス紀行 わが師マルクス・アウレリウス』参照)。

師が戦陣の中で『自省録』をメモしたのは、40代から50代後半までという。わたしが60代になんでも、年下となった師への敬愛は変わらなかった。いまわたしは70代半ばになったが、アウレリウス帝は依然わが敬愛する師である。

②そのわけはただ一つ、師の魂の純粹さである。飾らない人間性である。『自省録』はいわば個人の日記であって、もとより公表を予定していない。師の赤裸々な内面が記されている。それなのに、何度読んでも、師の気高さに感銘する。

師は内省する。

皇帝という色の染まらないよう注意せよ。単純な、善良な、純粹な、品位のある、飾り気のない人間。正義の友であり、神を敬い、好意にみち、愛情に富み、自己の義務を雄々しく行う人間。

そういう人間に自己を保て。哲学が君をつくりあげようとした、その通りの人間であり続けるように努力せよ。

おおわが魂よ、いつの日にか君は善く、単純になるであろうか。いつの日にか愛情に満ちた優しい心ばえの味を知るであろうか。いつの日にか満ち足りて、何物をも必要とせず何物にもあこがれず、享楽のために何物も欲せぬようになるのであるか。自らの現状に満足し、すべて現在あるものを喜ぶようになるのであるか。

③権力の頂点にたった人物とは思えない純粹さである。師と比べると、わたしの心はいかにもビジネスで汚れている。「わが魂に濁りあり。」『自省録』を読むたびにその思いを強くする。

人間の資質が違うので、いくつ歳を重ねようといくら努力をしようと、心のありようは師に及ぶべくもない。「かなわないなあ…」と思うが、それは完全脱帽の心地よさでもある。

④『自省録』の熱烈な愛読者は多い。ジョン・スチュワート・ミル、ゲーテ、ミシェル・フーコー、モンテーニュ、チェーホフなど。

中でも興味深いのは、トランプ政権の国防長官だったジェームス・マティスである(元海兵隊大将。後にトランプと意見が合わず辞任)。

⑤彼は軍隊に一生捧げ独身。戦史・哲学など数千冊の蔵書を持つ読書家である。上司からは「わたしが今まで出会った中で最も知的で洗練された男」と評された。その風貌もあって「戦う修道士」と呼ばれた。

『自省録』への彼の思い入れは、半端ではない。戦争にも『自省録』を持参して愛読したとい

う。軍人として常に死を身近に感じて、わが師と思いを通ずるものがあったろう。

マティスの生き方は、世間にはわたしと正反対である。しかし、マルクス・アウレリウス帝への思い入れに関する一点で、彼とは話があいそうな気がする。

2 歳を重ねるという事(『身辺の記』)

①最近、人の名前や物の名前が出てこない。長い間の友人の名前が出てこないので、「あいうえお…」と順に辿っていく。「か」にきて「ああ、加藤君だった」と思い出す。

60代はそれでよかった。しかし70代になると、そうは問屋が卸さない。「かきくけこ、さしすせそ・・・」と進んで「か」をスルーしてしまう。かといって、彼の名前が完全に頭から消えたわけではない。1~2時間して、ふとした折に思い出す。

②ちょっと前のこと�이思い出せない。新聞受けから新聞を取ったはずなのに、見当たらない。もう一度新聞受けを見るが空である。「おかしいおかしい」と騒ぎながら探すと、テレビの横に置いてある。そういえば思い出した。面白そうな番組があるので、録画をしようと放映時間チェックしたのだ。万事、この調子である。

③若い時は、些細な行動でも逐一記憶の棚に保存されて、瞬時にそれを取り出せた。今はぼんやりとした記憶が、薄く脳みそに印字されている感じ。だからうまく思い出せても、数秒から数十秒かかる。

④「今朝サプリメント飲んだっけ?」自分のことなのに妻に聞く。「飲んだわよ」と妻が即答することもあるが、「さあ見ていなかったから」ということもある。こんな会話をしばしば繰り返す。

長い間の結婚生活である。「パパもこの頃は衰えたわね」と妻が思っているのがよく分かる。ただ妻は口には出さない。「ママだって確実にオレの後を追っているよ」とわたしに反論されるのがオチだからである。

④怖いのは物忘れの先にある認知障害である。しかし、これとてもどうにもならない。ひどくなる前に対策を取るしかよい知恵が浮かばない。

かかりつけのA先生は50代半ばである。病院に認知症検査のポスターが貼ってあった。2万円ほどである。先生に物忘れのひどいことを縷々訴えて「そろそろ認知症のテストを受けてみたいんですが」と聞いてみた。

思いがけず「矢部さんのふだんの話しつぶりから見て、その必要はないでしょう。テストを受けても結果に出ませんよ」との返事。日ごろから「結構おしゃべりなお年寄り」と思われている気配があるが、それはそれとして一安心。検査は受けないことにした。

それだけの話である。読者の皆さんにはどうということもない話である。ただ若い皆さんにも確実にやってくる老化のヒトコマである。それが恐い。

3 嫌な感じ(『身辺の記』)

①嫌な感じである。もとに戻らないというのは、それはそれは嫌なものである。

若い時は風邪をひいても多少筋肉を痛めても、数日すれば直った。しかし、60代半ばになり、回復力がガクンと落ちた。1週間、10日たってもなかなか元に戻らない。空咳がずっと続く。筋肉痛も少し良くなったり悪くなったりを繰り返す。

②70代になると、その傾向がますますはっきりする。例えていえば、風邪をひいたらそれが常態になり、いつも微熱と咳とだるさが続くようなもの。

昔の生活に戻りたいと思っても、そうはいかない。たまに調子のよかつた昔に戻るが、その時間は短い。これにはがっくりする。

③「不可逆」というほど大変なことはない。もうもとに戻らないとは、つまり、希望がなくなるということ。これは辛い。「今はよくない。これからはもっと悪くなる」では、気が滅入って仕方がない。

④そういうするうちに、やっと新しい状況に適応しなければならないと悟る。

「苦難にあったたら、苦難について哲学すればよい」とは、精神科医のアルフレッド・アドラーの教えただろうか。

心の持ち方を変え、新しい状況に対応し、新たな希望を見つける。それが大切だと悟るまで、数年かかった。

4 人はかくも簡単に権力になびく（『処世論』）

①トランプ、習近平、金正恩、プーチン、エルドアンなど、無名だった政治家が権力の座につくや、わずか3~4年でたちまち権力を掌握し、強権政治・独裁政治を固めた。

わたしが予想していた以上に、民主主義的勢力はひ弱で、強権政治を許してきた。

(1) トランプ：わたしはアメリカの三権分立体制を信じていたので、トランプがここまで法を無視して強権を振うとは予想しなかった。また、共和党の指導者たちが、簡単にトランプになびくとは信じがたかった。

(2) 習近平：共産党の重鎮や反対派を抑圧し、これほど早く独裁体制を築くとは驚きであった。党内掌握に長い時間がかかると思っていた。

(3) 金正恩：独裁国家のトップには若すぎる所以、政権を掌握できるか疑問だったし、安定化するまでには長い時間が必要と思っていた。

(4) プーチン：エリツィン大統領から後継者に指名された時は、権力欲がなく、影の薄い、裏方の能吏タイプの人物という印象だった。ところが、大統領になると中央集権化を進め、強権政治家に変身した。今や「終身大統領」を狙う様子である。

②彼らがトップにつく方法はさまざまである。ある時は後継者指名を受け、あるときは社会の

混乱をきっかけにのし上り、大衆受けするキャチコピーで一時のブームを演出し、権力の座に就く。その後、彼らは権力を恣意的に行使し、強権政治・独裁政治に向かう。その手法には共通点が多い。

- (1) 周りを側近で固める→はじめは有能な人材を集めが、やがて側近で固めるようになる。政権内では「イエスマン（ウーマン）たちが増殖し、民間でも質の悪いとりまき連中が政権の威光を笠に着て甘い汁を吸い始める。
- (2) 従わない者は飛ばす・首にする→官僚を手なずける手段は報復人事、恫喝人事。「有能なキャリア官僚」ほど風見鶏となり、簡単に牙を抜かれてしまう。
- (3) 法を曲げて、自分に都合よい解釈をする→法の文言と論理を無視する。彼らはそもそも社会における法の意味を理解できない。単に権力行使の障害としか捕えていない。
- (4) 反対派を一掃し、強権政治を確立する→表面的には選挙があっても、政権がさまざまな方法で介入し、翼賛体制が完成する。

③驚いたのは、強権政治家が権力を握ると、マスコミがそれを「新しい現実」として受け入れ始めたことである。権力者のとるに足らない一挙一投足を報道し、コメントし、批判してみせる。しかし、それも逆に強権政治家の存在感を高め、支持層を固める作用をする。

2年もしないうちに大衆は新しい現実に慣れ、反対派もしだいに守勢に立ってしまう。わたしはこんな短期間に社会が変質するとは考えていなかった。この年になって、いまさらながら自分の不明を恥じた。

④以上から、この年になって学んだ事は、どんな小さなものでも強権政治の芽は摘まなければならないということ。「この程度は大丈夫、まあ目くじらを立てるほどでもないか」、そう思つてのうちに、われわれは「新しい現実」に慣れてしまう。こうしてそれと気がつかないうちに、社会は強権体制に大きく傾いていく。

5 近未来は悪夢かもしれない（『身辺の記』）

①妻はたまに「歳を取るって嫌ね。若い人たちは羨ましいわねえ。」という。それはどうだろうか。若い人だって確実に老いる。人の宿命である以上、それはそれで仕方がない。

②老いる事について、わたしはあまり深い感慨はない。今の若者もわたしと同様老いていく。人の運命など風に舞う木の葉のようなもの。明日どうなるかは誰にもわからない。

いや、わたしたちはむしろ幸運だった。高度成長期の果実を得たし、何より平和な時代が75年も続いたのだから。

③近未来は、わたしが生きてきた時代より確実に悪くなる。

新型感染症の流行、大雨・洪水・土砂崩れの日常化、台風・地震・噴火の多発、異常気象の深刻化、財政破綻、恐慌、食糧危機、治安悪化、強権政治家・扇動政治家の台頭、言論の抑圧など。

ディストピア(暗黒郷)が、口を広く開けて待っている。民主主義は試練に立っている。これからは大変である。若者にはむしろ「ご苦労さま。生きる事は本当に大変だね」とねぎらいの言葉を送りたい。

④われわれはこの試練を克服できるのか? 理念も理想もない政治家たちがはびこるさまを見ていると、わたしは悲観的である。新型コロナ対策を見ても、理解力に欠け、洞察力のない指導者たちが世界中にはびこっている。サイコパス、ナルシスト、パラノイアなどの強権政治家は、次々と起こる災害にまつとうに対処できるはずもない。

日本政治も例外ではない。ナルシストとエゴイストの侵食がとっくに始まっている。近未来は悪夢かもしれない。

6 強権政治家の超絶ストレス (『処世論』)

①トルコの大統領エルドアンの噂話の類である。

彼は毒殺されるのを極度に警戒している。大統領府には数名の専任チームがいて彼の飲食物を予め検査する。あるとき、毒見の必要性について知人に真顔で語ったという。「暗殺者にとっては食べ物に毒を仕込むのが最も簡単だ。だから、わたしは食事のときは毒殺を最も警戒している。」

確かに、狙撃したり、爆弾で狙うのは準備が大変だし、痕跡が残る。毒殺の場合は失敗しても犯人は分かりにくい。2016年のクーデター未遂事件で命からがら逃れたエルドアンにすれば、暗殺への備えはいくらしてもしすぎることはないのだろう。

②そういえば傍若無人、権力を恣にふるった暴君も、人心が離れるとたちまち殺されてしまった。

狂犬と呼ばれたリビアのカダフィ大佐は、排水管の中に逃げていたのを発見され兵士に殺害された(2011年)。イラクのフセイン大統領は絞首刑(2006年)、ルーマニアのチャウシェスク大統領も公開の銃殺刑にされた(1989年)。わずかここ三十年の間である。彼らは権力の絶頂にあった時、自分の末路がこんなに悲惨なものとは予想もしなかったに違いない。

③強権政治家の最大の弱みは、権力を失えばすべてを失うことである。彼らは敬愛され、信頼されているわけではない。人々は弾圧されるのを恐れ、または、権力のおこぼれに与かろうとして従っているだけ。権力者もそのことを肌で知っている。

④強権政治家の内面はひ弱で、精神は不安定である。人気投票や世論を気にし、おののき、フェイク情報を流して世論を操作しようとする。多数を形成し少数派を弾圧する。反対する者を暗殺する。強権政治家の多くは、隠された劣等意識の持ち主で、自己肯定感も弱い。だから、反対派の意見を聞こうともしない。聞く度量もないのは、弱さの表れに違いない。

⑤トランプ大統領が大金持ちの家に生まれようと、おそらく幼児期にトラウマがあり、劣等感

は深い。たとえ世界で何千万人が彼のツイッターを追っていようと、精神の不安定は隠すべくもない。1日に何時間もかけて、一国の大統領がSNSに投稿するさまは漫画チックでさえある。

彼が退陣した後は、今以上に次々と多くの裁判に悩まされるだろう。もっとも彼はサイコパスのようだから、普通人のような恐れは感じないかもしれない（サイコパスは、扁桃体の機能が低いので、常人のような恐れは感じないといわれる）。

⑥プーチン大統領の暗殺未遂事件は明らかにされただけでも5回。最近の憲法改正で2036年まで大統領職に就く資格を得て、ますます権力強化へと突き進む。やめようにも、自分、側近、とりまきの財閥・政商の命運にかかるから簡単ではない。引退したらしたで不穏な老後が待っている。進むも退くも修羅の世界である。

プーチンはやめるタイミングをとっくの昔に間違った。これから彼は老化の坂を下るばかり。権力から滑る落ちるときのことを考えたら、眠れない日々が続くに違いない。

⑦強権政治家たちは大衆を欺き、反対派を抑圧することで権力を握るが、今われわれが直面している新型コロナや激甚災害対策には、そんなものは無意味である。自然相手に、言葉によるごまかしも、利益誘導も、恫喝も効かない。必要なのはリーダーの知力（=理解力、洞察力、判断力、そして器量）である。

精神病質の強権政治家たちに、適切な対策が取れるはずがない。彼らの何人かはそれほど遠くない時期に、石を以って追われるだろう。数年後、どれだけの強権政治家が安泰か、それとも失脚しているか。是非見届けたいものである。

7 備忘録「コロナと日本人」(1)

7.1 日本軍失敗の悪夢

①最近の政府のコロナ対策にはがっかりである。拙速、場当たり、泥縄式である。

特に、イベント緩和をめぐる7月10日前後の国と東京都の対応はひどい。

一方で感染予防を呼びかけながら、他方ではイベントを緩和するちぐはぐな対応。まるで旧日本軍の失敗を再現するようなドタバタである。

②追って、この点は続編でカバーする予定だが、参考までに日本の組織の欠陥を要約する（出典『失敗の本質-日本軍の組織論的研究』野中郁次郎）。

- (1) トップの指示が曖昧である。
- (2) 不都合なデータを直視しない。
- (3) 前例や方針に縛られ、自由な発想（=解決策）ができない。
- (4) 指揮系統がはっきりしない。
- (5) 誰も責任を取らない。

7.2 コロナはコロナの摂理によって動く

①人間の思いと自然の摂理は無関係である。

ウィルスはウィルスの摂理に従って感染する。人間は自然の摂理の中に生きており、それに適応することだけが生き残る道である。人間の感情や論理は効かない。人間の思いやファンタジーによって、自然の摂理を変えることはできない。コロナはコロナの摂理によって動く。人間の思惑で変えることはできない。

②コロナは、人の思惑とは関係なく感染拡大する。

これは大変なことである。自粛疲れで多少ハメをはずしたい、勉強が遅れているから早く登校したい、ファンが待ち焦がれているからコンサートを開きたい、オリンピック・パラリンピックの準備がある、これ以上自粛していては経済が破綻するなど、活動再開の理由はいくらでもある。

どれもそれぞれの理由はあるが、それもあくまで人間側の事情に過ぎない。コロナの感染防止とは何の関係もない。コロナはそんなこととはお構いなしに感染拡大する。

③「完全な対策」は「不完全」である。

最近は三密を避け、社会的距離を保てば感染が防げるような風潮だが、それは間違い。

人出そのものが感染を広める。それは既に再開したアメリカ諸州の例ではっきりしている。無自覚に間違った風潮を広めたマスコミにも問題がある。結局、人出をしないことが感染予防の最大の対策である。

まだまだコロナ感染のメカニズムは解明できていない。ごく最近でも空気感染の可能性が議論されている。人間にとって「完全な対策」でも、コロナにとっては感染拡大可能。ちょうど小さな穴から堤防が決壊するように、コロナは一挙に拡大する。現在の「完全な対策」は感染防止には程遠い。

④「自然の摂理」を「人間の事情」に優先させる哲学が必要である。

人間の思惑、事情を優先する考えを捨てる。もっぱら、感染拡大を防止する対策を第一義的に考える。それが拡大防止の基本である。感染抑制と経済再開の両立うんぬんは、それ以後の第二義的な話である。

なぜなら、両立うんぬん以前に、さまざまな検討が必要であるから。

- (1) そもそもほんとに両立できるのか？
- (2) 両立とはどのような形の両立か？ 2019年以前のような社会・経済活動をめざすのか、または、もっと縮小した形の両立か？
- (3) 曲がりなりにも両立できるとすれば、その時期はいつころを目指すのか？

政府の対策は、漠然と両立を前提としているが、それは方法論的に間違い。「自然の摂理」を「人間の事情」に優先して考える、逆転の発想が感染拡大防止には有効だろう。

このことを政治家たちはどの程度理解しているのだろうか。

7.3 「前のめりのイベント緩和策」のリスクは大きい

①7月6日ころまで

(1) 7月2日、東京都の感染者数は50人、60人レベルからいっきょに100人台になった。

しかし、国や東京都は「経済再建」に前のめりである。

6日になっても、政府はイベント開催を10日に緩和する方向。プロスポーツなども、無観客から5000人までは認めるという。

(2) イベント会場に行くまでのバス、地下鉄、JRの利用、その途中での多数の人との接触、つり革の使用、公共トイレの使用、そういうさまざまな機会に感染が広まる。イベント会場で三密を避けたり、社会的距離を保っていても感染を防げるわけではない。

(3) 6日のBBC放送は「コロナは空気感染 (airborne transmission) する可能性がある」と報道。これを追って、日経の11日の夕刊は「会話や呼吸で発生した飛沫が長時間空气中を漂い、数十メートル離れた場所でも感染するリスクが浮上している」旨のジュネーブからのニュースを伝えた。この情報は単なる可能性を述べただけで、発生の蓋然性まではまだわからない。しかし、今までの三密対策を根底からひっくり返しかねない情報である。

②7月10日前後の動き

7月9日から東京都の感染者は一挙に増えて、4日連続して200人台を超えた。しかし、政府も都もこんな情報にはお構いなしに経済活動開始一色である。

①小池都知事は「新しい日常に踏み出しているのだから、第一波の時とは違う」として、緩和策を後押し。

②プロ野球の観客上限5000人に緩和され、テレビは「待ちわびていた。少し怖いけど、今日は特別だ」とファンの喜ぶ表情を放映。

③赤羽国交省の10日の会見。「Go to 事業だけ予定を変更しなければいけないという認識はない。感染拡大防止と社会経済活動の両立に取り込むのが政府の方針だ」。

国内の旅行代金の半額相当を補助する「Go to トラベル」事業を、8月上旬の開始予定を7月22日に前倒しすると表明。

④7月13日。菅官房長官は記者会見でGo to キャンペーンについて聞かれて。「Go to キャンペーンの延期については全く考えていない。感染防止策をしっかり講じながら社会経済活動を段階的に引き上げ両立したい。」と発言。感染者数拡大のニュースより、経済活動の再開に重点をおいた。

7.4 はどうすべきなのか？

①「完全な対策」の間違い。

最近は政治家、経済人、マスコミは「経済再建」のムードに押し流されている。専門家でさえもそれに遠慮している。果たしてそれでよいのか？

マスコミも「対策すれば大丈夫」なようなイメージを撒き散らしている。

しかし対策は完全ではない。むしろ、「完全な対策」とは何かはまだ手探りである。

すでに経済を再開した欧州やアメリカ各州の失敗を見れば、そんなに生易しいものではないとわかる。コロナという未知のリスクを甘く見るべきではない。

②そういうと「このままでは経済は回らない。大変なことになる」と政治家はいう。しかし、いま緩和策をとって、感染が拡大すれば経済はこれ以上に回らなくなる。いまは何とかしのいでも、次回、次次回は致命的（大量の倒産、日本国債の大暴落、恐慌など）になる可能性が大きい。

③はどうすればよいのか？

(1) イベント緩和策は即刻停止。今後の感染者の推移を見たうえで、緩和するか否か、その時期、その態様を再検討。

(2) Go to キャンペーンは中止。人出を奨励しかえって感染を拡大する。また、巨額を投入する意味もなく、効果も間接的である。

(3) 緊急事態宣言の発動基準を「明確かつシンプル」なものに見直す。基準は箇条書きで3つから最大5つ。「感染者数」を優先基準とする。基準発動の解釈は独立した第三者委員会に委ねてもよいかもしれない（わたしは、業界からの働きかけや自分の野心や保身のために、基準を恣意的に解釈する政治家に、人命も国の運命も託したくない）。

わたしはコロナの影響は一過性のものではなく、かつて歴史上そうであったように、政治、経済、社会の大変動を起こす可能性が大きいと考えている。この点については続編で述べる予定である。（2020年7月13日記脱稿。続く）